

中川先生の冒険と夢について

二三八

坂井 セシル

中川成美先生の引退を記念して、一言フランスからの言葉を捧げたいと思います。

第一に日本文学の専門家として、誰よりも早く外国にでかけ、特にアメリカ、ヨーロッパの日本文学研究の推進、また長期にわたる交流に携わる姿には敬服します。端的に言うならば、日本研究をローカルなものからグローバルな領域へ変化させる動きに大きな役割を果たされたのです。特に文学という言語芸術は、母国語、国語、国家といった文化的政治的枠組の中で発展し、その分野の専門家に要求されている知識はまず常識として、自国に関する高度な知識ですが、それを他国の専門家と理論や方法論や解説論の上で協力し合ってゆくのは一つの冒険です。一九八〇年代に戻るとさらにリスクを伴う賭けであったと言えましょう。学術的な連携は今でこそ、国際化の中心であり、グローバル化における激しい世界競争（になってしまった大学の場）では、日本のサバイバルもその連携に順じ、また言語的障害を乗り越えて（つまりは英語に翻訳してゆきながら）論文を書くことにあると言われています。そのような体制を中川先生は予期していたのではないのでしょうか。

ステイブ・スミス、英エクセター大学学長のインタビュー（『朝日新聞 GLOBE』二〇一五年四月一九日～五月二日、一〇頁）では「ニュートンのように個人で研究したのが第1世代。大学ができ組織で研究を進めたのが第2世代だ。第3世代では国が研究に投資を始め、経済や軍事などの

分野に生かし始めた。第4世代は他国の研究者と連携するのが特徴だ。」という見出しがあり、冒頭では「英国では1980年代、外国人が一人も執筆者に入っていない論文が全体の85%にのぼった。2011年には48%と半分以上だ。日本や中国では、今もまだ75%の論文が国内の研究者だけで書かれているのは対照的だ。」と続きます。主に科学の分野を捉えたネオリベラル派の言説である、とは言え、文学研究の構造や行方について、考えさせられるのではないのでしょうか。

ただし、組織よりも内容を尊重した場合、研究の方向性においても、中川先生の選択は常に独創的です。私の場合はフランスで、現代の先端的な多文化作家、多和田葉子や、二〇世紀初頭の探偵小説を超越した作家江戸川乱歩をめぐるシンポジウムなどで、研究成果を批評しあったりしました。これらは、偶然とは思えないぐらいに、文学的興味が何かメインストリームに属さない共通の場所に根ざしているように思えます。

さらに、中川先生は数年前からクイア理論を取り入れ、近現代日本文学を考えてゆく作業を続け、国際的な視野を修士や博士課程の学生に収得してもらおうべく、日本でも度々にその枠組での研究会やシンポジウムを開催なさいました。例えば、「クイア理論と日本文学——欲望としてのクイアリーディング」（二〇一五年一月、於立命館大学）では、著名な専門家と共に立命館大学の院生達の発表を聞くことができました。きつと、

若い彼ら、彼女らにとって、忘れがたい経験となり、またそれぞれの研究の励ましにもなったことと想像します。クイア理論が例えば直接的に身体構造、性表現を分析して行く事自体に従来の文学研究にはない斬新さがあり、また正当性という大きな規範を覆す批評性を持っています。このように、中川先生は努力に努力を重ね、徐々に国内での日本文学への理論的アプローチのラインを移動させてゆくことに成功しているのだと思います。

数多くの後任者がこれからも、地道な努力と気丈な勇気を基盤にした、

このような冒険的な運動に関わってゆくことは、文学研究が必要としていることで、また現代作家たちの文学創造を支えてゆくことでもあります。二一世紀の文学というすばらしい言語芸術が、新しい環境の中で新しい視野を求めながら発展してゆくことを心より夢みながら、オ・ルヴォール (au revoir)、つまりまた会いましょう、という言葉で結論にかえます。

(パリ・デイドロ大学教授)